西陣明治の群像⑬

# 中興の祖　川島甚兵衛

綴錦（別名、天笠織、ゴブラン織）は十五世紀、ルイ王朝時代に、その製法が確立されている。日本では安永年間に製織が始ったといわれているが、南蛮貿易で渡来したフランス製品の模作にとどまり、しかもそのほとんどが、煙草入れや袈裟などの小物であった。

当時の織法は時間と手数がかかりすぎるせいもあって、西陣ではほとんど着眼する機業家はなかった。

この綴錦に本格的に取組み、その織法を完成させたのは川島甚兵衛である。

甚兵衛は壁かけや絨毯として用いられているゴブラン織に注目し、明治の初めから研究を始めた。しかしそれまでの技法ではヨーロッパ製品をしのぐことができず、明治十九年、自らフランスに渡航する。パリの官立ゴブラン製造所を訪れ、織法を修学、翌明治二十年帰国する。ただちに国内生産の研究に着手した甚兵衛は、二年後の明治二十二年パリ万国博覧会に壁掛五点（四季花鳥の図）を出品している。れらのの作品は金賞を受け、リヨン商業会議所に買収られた。日本製のゴブラン織として世界的に認められることとなったのである。

明治二十三年には内国勧業博覧会に大追物図壁掛（タテ七尺、ヨコ十二尺）の大作を出品し衆目を驚かせた。さらに葵祭図壁掛（タテ十一尺、ヨコ二十四尺）日光図壁掛（タテ十二尺、ヨコ二十二尺）など、相次いで大作を発表し、その声価はゆるぎないものとなってゆく。

織物産地としての西陣の技術革新は、ジャカードの導入など明治初期から急速なテンポで進められてきたが、甚兵衛の綴錦織法の完成によって先進ヨーロッパと肩をならべるまでに達したといってもよい。西陣織の海外輸出の道を拓くとともに、室内装飾という新分野に進出する契機となったことから考えると、機業家としての川島甚兵衛は、明治の西陣中興の祖とみることができる。

（福本武久）